

氏名（本籍）	しゅう るう 秀 茹（中国）
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	甲第 103 号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 24 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	日中両言語における外来語の対照研究
論文審査委員	主査 教授 欒 竹民 委員 教授 岩井 千秋 委員 教授 横山 知幸 委員 教授 侯 仁鋒（県立広島大学） 委員 教授 柚木 靖史（広島女学院大学）

論文内容の要旨

言語間の借用行為は言語、殊に語彙の形成、豊富化、多様化において必要で且つ不可欠な役割を果たしている。当然なことながら、日本語と中国語の両言語においても早くから外来語という言語現象が注目され、研究対象となっている。日本語における外来語については多岐にわたる研究が行われ、量・質とも著しい成果が挙げられているが、中国語との比較研究においては、個別的、断片的なものが散見されるものの、包括的な比較研究が試みられたことは殆どない。一方、中国語では、発表された著書、論文などは自国語における外来語に関するものが多く、しかも、概説的、内省的な内容に偏っており、他言語、特に日本語との比較対照研究が殆ど行われていないのが現状である。本論文はこのような研究現状を踏まえながら、日中両言語における外来語について比較するという見地に立脚して、その使用実態を実証的に分析することによって全体像を明らかにすることと、両国の異文化に対する受容の差異が外来語の導入や使用にどのように影響しているかを探究することを目的とする。更に、両言語の相違をもたらした言語内部による要因や社会、文化等による言語外の変因をも探ってみる。

本論文は日本語『新明解国語辞典』（2005年版）と中国語『現代漢語詞典』（2005年版）を研究資料として用い、独自の認定基準に基づいて両辞書における外来語を抽出した上で、語彙論、意味論の観点から記述、解析する。その上で、両言語で同様な意味分野で使用される外来語に焦点を当て、それぞれの量的構造の差異、意味領域の特徴などの考察を行う。続いて語形成と語構成という視角から両言語の造語法、語構造の異同を考究し、両国の言語政策、外来文化についての受容意識等と外来語の多寡との関係を考察する。これらの目的から本論文は基軸とする四章より構成され、その前後に序章と終章とを配している。さらに、巻末には今回調査によって採録された全てのデータを資料編として添付している。各章の概要は以下の通りである。

序章では、まず本研究の目的と意義を述べ、言語文化論的に外来語の導入を捉えることに言及し、先行研究の概観、整理及び研究成果の検証を行っている。その上で、本研究の目的を達

成するために先行研究の外来語認定基準、範囲及び方法を援用しつつ、本研究の外来語認定基準を定め、調査範囲、対象を選定し、調査方法を案出している。さらに研究資料の性格及び使用の意図等についても言及している。

第一章では、日中両言語における外来語について計量的分析、比較を行い、さらに外来語の表記、出自、品詞別等を巡って論を展開している。それによって次の諸点が判明した。まず、上述の辞書から抽出した外来語を定量的に分析、比較したところ、全体量において日本語は7435語あり、全語彙数の9.72%を占めており、中国語の2168語、3.34%を大きく上回ることが明らかになった。日本語の外来語が中国語より多いという通説が初めて統計数値で検証されたとも言えよう。さらに語種については、中国語は表意性を重視するため、外来語と表意の漢字とを合成した混種語の語数が多く（811語）、数量の少ない中国語の外来語の中で際立った存在であり、また、中国語の外来語の有力な造語法であると言ってもよい。外来語の出自は両言語とも英語からのものが多いが、中国語では英語よりも日本語からの借形語の方が多く1163語に上り、中国語における外来語総量の半分以上を占めており、日本語と異なった一面を見せている。品詞については、両言語とも名詞が圧倒的に多い結果となったが、日本語では、文法構造の特質とも言われる、外来語に「する」を付けてサ変動詞となることや、「な、に」を付けて形容動詞として使われることのみならず、「アジる」「サボる」「ダブる」「デモる」などのような完全に日本語化した外来語もあって、日本語と外来語との融合、同化の深さを呈出している。

第二章では、両言語の外来語が如何なる意味分野に分布されているかについて分類を行った上で、統計結果を示しながら分析、比較を行っている。その結果、日本語における外来語では「物品」2702語、「学芸」1624語、「社会」835語が上位三つの意味分野となったのに対して、中国語の外来語は「学芸」417語、「自然」406語、「物品」378語となり、両者の異同が明らかになった。一方、最下位の意味分野としては、日本語は「変動」245語、「心情」300語、「性向」329語であったのに対して、中国語では「変動」88語、「行動」100語、「性向」111語となった。これらの三つの意味分野は人間の精神的、肉体的諸活動や情意等の基本的概念を表わし、それを構成する語彙はその言語を支える基本的語で成り立っているため、両言語のいずれにとっても外来語の参入が難しいと言えよう。「物品」分野では両言語とも機械名が多いという共通点があるが、下位の意味分野では日本語は「衣類」「食品」及び「家具」の外来語が多く、中国語と異なっている。「自然」分野では両言語はいずれも物質名が殆ど外来語からなるという点で一致しているが、下位の意味分野では「動物」「植物」名を表わす外来語は日本語の方に多く、中国語との差異が浮き彫りになる。最も注目すべき両言語の違いは、日本語では既存語で表現できる意味概念を、新たに外来語を導入して表すという借用傾向が顕著で、外来語の増加をもたらした要因の一つとなっているが、中国語の外来語では斯様な傾向は見られないことである。

第三章では、日中両言語における外来語の造語法や語構成を中心に比較しながら両者の異同及びその要因についても考察している。日本語ではカタカナ表記による音訳外来語が最も多く全体の8割を超えているが、中国語では日本語からその語形をそのまま借用する借形法で導入された外来語が最も多い。その上、借形法は旺盛な造語力に繋がるという特質も備えている。語構成については単純音訳語が約7割を占めている日本語に対して、中国語は「音、形、意」という三位一体の漢字の特徴によって外来語の借用においても表意性が求められるため、単純

音訳語は極少で、「音訳+意訳」等のような合成語が6割以上に達している。たとえ単純音訳語であっても、音だけではなくその外来語によって表現される意味概念に相応しい漢字、分かりやすい漢字、多義となりにくい漢字等を選んで充てようとする選択意識も働いており、カタカナという音のみで借用する日本語の単純音訳語との違いは歴然としている。一方、日本語では、例えば「老人席」と言わずに外来語「シルバーシート」を用いるのは表意性を追求しようという中国語と異なって、寧ろ漢字の表意性をわざと避け、表意文字による視覚のインパクトを和らげようとする意識も見られる。

第四章では、日中両言語における外来語語彙量の多寡の差異をもたらした言語の内・外に関わる要因を巡って考察を行っている。言語外の要因に関しては両国の言語政策、異文化受容等に焦点を当てている。言語内の要因に関しては両言語の統語的、語彙的、意味的特質に注目して分析、比較を行っている。

終章では、日中両言語における外来語の共通点と相違点、及びそれぞれの使用実態、傾向、造語法等の特質性について取りまとめ、今後の研究課題についても述べる。

なお、論文の細部については、説明の重複や不正確な表現、それに個々の語に関する解析、意味の確定など、問題点も若干残っており、特に言語運用レベルにおける外来語についての調査、分析、比較が必要となり、今後の課題として一層の研鑽が求められよう。

論文審査の結果の要旨

平成26年2月19日の国際学研究科委員会で、本審査委員会の設置が承認された。審議に際して次の具体的な手続きに依ることとした。

1. 学位論文を審査委員に送付し、各委員が査読を行い、その結果について博士論文審査委員会で報告し、論文の内容、今後の研究課題、方向等を巡って口述試験を行い、学位授与の可否を判定する。
2. 研究者としての資質、能力を把握するための一環として、公開の発表会を設け、そこでの口頭発表や質疑応答の内容について審査委員が評価する。

2月24日に実施した公開発表会、口述試問では、まず、学位申請者の60分間の口頭発表に続き110分間の質疑応答を行った。質疑応答では、主として学外からの柚木審査員と侯審査員に本研究に対するコメントや質問を優先してお願いした。その席において、学位申請者は意欲的に学位論文の全容を紹介しつつ、要領よく要点を絞った発表を行った。質疑応答では研究の目的を達成するために行った調査の方法、内容から研究の方法、論考の手順並びに結論に至るまでの質疑がなされた。それに対して学位申請者は的確に答えた。その結果、本研究は実証的な観点から意欲的に取り組まれており、説得力に富んだ、完成度の高い研究であるといった評価が審査委員全員から寄せられた。公開発表会では、出席者からの厳しい質問に対して学位申請者は丹念に答え、質問者を納得させることができると共に今後の課題への認識を表明した。本論文は日本語と中国語との外来語についての比較対照研究に新たな知見と示唆を与えると同時に、日中両言語における外来語研究、教育に資することが期待され、また、日本語教育と中国語教育への応用、発展にも寄与し得る力作であると評価される。

審査委員による事前の論文査読、審査委員会での口述試験の結果に基づき、本審査委員会は、本論文は、①「調査、分析の綿密さ、研究技術の妥当性」、②「研究方法と論点との整合性、独自性」、更に③「研究テーマの適切性、将来性及び研究者としての資質」において、本学の課程博士の学位論文として適格であるとの結論に達した。審査委員会としてここに報告する。